演題番号57

# 読書が困難となった症例に対する介入
# - 第二報　言語性短期記憶における音韻表象の保持に着目して -

○藤原 瑶平[1) ] 小倉 亮[1)] 河野 正志[1)] 市村 幸盛[1)]

1) 医療法人穂翔会 村田病院

【はじめに】

読書が困難となった症例に対し，読解の改善を目的に，音韻表象の保持に着目し介入を行った．以下に報告する．

【症例紹介】

60歳代男性，心原性脳塞栓症を発症，右放線冠と左頭頂葉に散在性に梗塞巣を認めた．言語機能は，単語理解良好だが，長文理解が困難であった．発症45日後，読書は「読めるようになったけど内容を忘れる」と記述した．WAIS-Ⅲは言語性IQ85，動作性IQ54であり視覚処理に低下を認めた．Token testは156/165点であり，色を間違えるなどエラーを認めたが，構文理解は可能であった．SLTAは口頭命令と比較し，書字命令にて反応が遅延していた．言語性短期記憶課題として，短文の復唱は可能，数唱や無意味音節の復唱は，共に低下しており，音韻の保持に低下を認めた．

【病態解釈・治療仮説】

視覚提示された文または文章の読解においては，音韻表象を活性化し，言語性短期記憶により保持，意味処理を促すことが，内容理解を支える役割を持つとされる（moritaら，2002）．本症例においては，音韻表象の保持に低下を認めていたことから，意味処理が十分に行えず，断片的な内容理解に留まり，覚えられないという現象に至っていると考えた．そのため，意味処理の基盤である音韻表象の保持に対し介入することで，文読解の改善が得られるのではないかと考えた．

【介入】

2週間の介入を実施した．音韻操作課題として，音韻の配列順の変換，単語や文に含まれる音韻判断課題や，pointing span課題を状況図を用いて実施した．

【結果】

WAIS-Ⅲは言語性IQ93，動作性IQ71となり，視覚処理能力の低下は残存したが，SLTAは書字命令での，即時的な反応が可能となった．読書はゆっくり読めば内容理解が可能となった．

【考察】

読解において，言語性短期記憶に低下を認め，音韻表象が減衰しやすい状態であると考えられた．そのため，介入としては，音韻表象を利用しやすい状態で保持できるよう，注意制御を促進する目的で．音韻表象に操作を加える課題を中心に実施した．また，その後に状況図を用いたpointing span課題を実施し，音韻表象を保持し，意味処理を賦活させるといった段階付けにより，読解における一連の認知プロセスの活性化に有用であった可能性が考えられた．

【倫理的配慮】

発表に関して本人に口頭で説明し，同意を得た．